



なぜ英語ワークには項目・見出しがあるのか?

●『創学舎ニュース』のバックナンバーにもよく見られる表現だが、勉強と部活は似ている。実に共通点が多い。世界レベルのスーパープレーに見とれる時期かもしれないが、冷静に、現実的に、部活動と日々の勉強を見直してみよう。

●まず、部活動の練習メニューについて。毎日、毎回、試合形式の繰り返しではないはずだ。体力づくりのためのメニュー。基本技術を身につけるための練習。フォームを確認・修正・調整するためのもの。セットプレーに特化した練習。フォーメーションを理解・徹底させるためのもの。個人で行うもの。何名かで行うもの。全体で行うもの。様々に細分化されているはずだ。

●また、体力づくり一つにしても、持久力なのか瞬発力なのか、何を意図するので練習の内容も変わる。学生時代、「これやつとくと、後で〇〇ができるようになるぞ」と、意図や効果性を教えてくれる先輩がいて、ずいぶん助かった。

●中学生には、定期テスト前の勉強の仕方を解説した『ハンドブック』を渡している。もう一度目を通してほしい。それぞれの科目の意図が見えてくるはずだ。

●英語では、教科書準拠のワークについても触れている。現行のワークの「章立て」、「各項目」、「見出し」の細かさに気付いてほしい。

●それは「文法」の演習のための問題なのか、「重要語句」「イディオム」の確認のためか、「教科書

本文の内容」の理解を深めるためなのか。それぞれの狙いを意識しながら解いてほしい。(優秀なアスリートは練習メニューの意図を理解し、練習の量も、練習の時期も自分で決める)

●どうか、「やばい、このワーク提出かよ！とりあえず急いで埋めとくか。」「ああ、丸付けメンドくさ！」「うう、なんか手がしびれてきた。オレの手よ、もつと速く動け！」という不毛な活動からは早く抜け出してほしい。(「とりあえず走つとく?」「なんでこの練習してんだっけ?」というアスリートはいない)

●さらに、前回までのテストの答案を見直し、自分の失点の原因を探ること。不足していたのは文法の理解なのか、本文に出てきた表現なのか。そもそも本文内容の勘違いなのか、スペリングの甘さなのか。項目分けができるだろうか。練習試合(文化系ならリハースル)であればその後必ず、自分のプレーを、チームの連携を振り返っているはずだ(優れたアスリートは失敗からも多くを学び、自分で課題を設定する)。練習試合、または本戦の後、何も考えないアスリートはさすがにいない。



●これがテストになるとどうだろうか。テストの後、自分の失敗を真剣に見つめられているか?その時は一瞬本気でも、いつしか忘れていないだろうか(私もそうだったし、今でもそうかもしれない)。

●そしてテストの前、きちんと動いているのか。学習するための道具は目の前にあるのに。学習の仕方を記載したハンドブックもあるのに。教科書の準拠ワークで言えば、学校と塾の二種類を持っているから、自動的に変化のある繰り返し学習・復習にもなる。同じ章を比較しながら解くことも共通点を探しながら解くことだってできるのに。

我々は恵まれている。恵まれていることに慣れすぎていないか。

●あるアスリートは、「本気をどれだけ維持できるか、それが才能。」と語る。別のアスリートは、「自分は臆病でメンタルが弱いのでモチベーションに波がある。でも波があるって知ってるから日々工夫して、必死で補っている。」と語る。世に出るアスリートでさえこうだ。自分の姿勢を支えることに真剣であり、本気であり、かなりのエネルギーを傾けるらしいのだ。では、我々はどうか。普通に暮らしている中で、やる気を自分で管理できるのか。

●我々に工夫できることは何か。ぜひハンドブックにある各科の意図を読み取って、納得して学習してほしい。

●「ビタミンCは美容と健康によい。」よりは、「ビタミンCは、抗酸化作用、抗炎症作用など四十種類の作用があり、疲労回復・筋肉の活性化・抗ストレス効果が高い。しかし人間の体内では作れないのでどんどん減ってしまう。ゆえにまめに補給する必要がある。」と言われたほうが継続できそうな気がしませんか? (五日市)



正しいフォームを身に付けませんか

最近、生徒たちを見て思うことがあります。

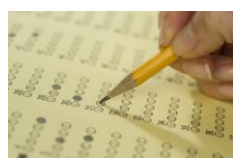
それは、間違った鉛筆の持ち方をしている生徒が多いということです。とくに多いのが、薬指の側面に鉛筆を添える持ち方です。(適切な持ち方の場合、中指の側面に添えます。)「鉛筆の持ち方なんて、どうでもいいよ。」「鉛筆の持ち方を間違えていても、生きていけるよ。」「そう思っ

ている人がいると思います。確かにどうでもいいことかもしれない。間違えていても、生きていけます。これはあくまで価値観の問題です。

人間の動作には正しいフォームというものがありません。野球を例に挙げてみましょう。ボールの投げ方や捕り方、そして打ち方に至るまで、基本となる動作があります。これらは科学的に分析された、効率的、かつ、合理的な動作です。プロ野球中継や大リーグの野球中継を観ていると、個性的なフォームの選手が多く、この話が矛盾しているように思いませんか。しかし、彼らは基本的な動作を身に付けた上で、自分自身の身体的特徴や運動能力を踏まえた上で、自分自身にとって適切なフォームを作り上げているのです。高校野球はまだそのレベルに達していない選手が多いので、基本的な動作でプレイしている選手が多いですね。

鉛筆の持ち方も同じです。適切な持ち方とされている形も、やはり、効率的、かつ、合理的な持ち方となっています。不適切な持ち方と比べ、一番大きな利点は、疲れがあまり溜まらないことだと思えます。疲れが溜まらないから、長時間鉛筆を握っていられます。そして、長時間鉛筆を握っていられるということは、長い時間、学習を続けられることにつながります。これは非常に大きいですね。

ところで、皆さんはこんな経験はありませんか。とくにスポーツをしている方々に該当する話だと思えます。試合を観戦していて、美しいフォームの選手を見て憧れ、その反面、ぎこちないフォームの選手を見ると、「もつと練習した方がいいのに。」とか「自分はああんたたくない



な。」と思ったことはありませんか。実は鉛筆の持ち方も同じです。社会に出たときに不適切な鉛筆の持ち方をしていると、周りの他者からどう思われると思いますか。何となく、想像できるのではないのでしょうか。

この話はあくまで、一参考意見です。この話を読んで、適切な鉛筆の持ち方を心掛けるかどうかは、皆さんの価値観次第です。(村田)

勉強する理由

皆さんはなぜ勉強をしていますか？何か目標があるのですか？それとも自分のため？誰かのため？なんとなく？

私は小学校六年生の頃に私立中学校の入学試験を経験しました。地元の公立中学校には行きたくなかったのです。その理由は、地元の中学校では毎年健康診断で「採血」が行われるからです。私は注射が大嫌いで、それをしたくないので中学受験の道を選びました。勉強は好きでも嫌いでもありませんでした。中学入試前は一切特別な勉強はしませんでした。しかし、合格して私立中学校に入学することができました。

中学一年時の一学期期末テスト後に通知表が返されて、そこには学年順位が書かれていました。一六三人中一六一位でした。戦慄が走りました。勉強をしなくても私立中学校に受かった自分は天才で、何もしなくても大丈夫だと思ひ込んだまま過してしまっただけです。

家に帰り両親に通知表を渡すと、「最下位じゃなくてよかったね！」と笑顔で言われました。私はそのときになんだかとても申し訳ない気持ちになりました。高いお金を払って通わせてもらっているのになんとなく過している自分にひどく反省しました。私は勉強を始めました。しかし急に特別なことは

できません。基本的なことをするようにしました。「授業を聞く」

「わからないままにしておかない」

「宿題を毎回完璧な状態で提出する」

どれも当たり前のことですが、意識しなければできません。授業を聞くときも正しい姿勢でなければ集中が続かない、わからないことをそのままにしておいてわかることなんてありえない、宿題を適当にこなしては復習にもならないし、それだけで時間の無駄、宿題を提出しないなんて問題外。私はこれが続けました。特別なことはありません。



中学三年時の期末テスト、通知表には一六三人中二位と書いてありました。一位ではありませんでしたが悔しくありませんでした。

両親は喜んでくれました。それを見てとても安心しました。私は勉強をするという環境を与えてくれた両親に少しでも恩返しをしたい、心配させたくないと思ったから、勉強をしていたのです。結果的にそれは大学受験や社会に出る自分のためにもなっていました。

学校以外で勉強ができるという環境にいられることを当たり前だと思わないでください。それを支えてくれる人がいます。

なぜ自分が勉強しているのか、今一度考えてみましょう。その理由がわかったとき、私たちがお手伝いをします。(中野)

模試とキンハートと弱点克服 ①

●模試の受け方、その復習の仕方と意義について、おそらく受験生はほとんどが知らない。勿論、いわれたことなど皆無だろう。

●実は模試は、大きな役割があり、それを理解し実行することで、キミは大きく成長するのである。以下、気持ちを込めて読みなさい。

●模試は、キンハートの持ち主にとつては、非常に苦しいものだ。本番の入試は、当然もつと苦しいはず。だが、この「苦しい」ということが大きな成果をもたらしてくれる。



●キンハート(人一倍心配性)の人は模試の前日から、心配のあまり眠れなかったり、お腹が痛くなったりする。構わない。心配しなさい。当日は、緊張で手が震える人もいるだろう。構わない。震えるままにしなさい。試験が始まったら、どれも難しそうに見えて、問題が頭に入っていない。問題を讀んでも、何が書いてあるのか理解できない。頭の中は真っ白。「まずい。落ち着こう。」と言いつつ聞かせるが、時間だけが過ぎていく。何とか答を出せた所は書いて、他は「カン」で適当にうめて終わり。構わない。そのままやりなさい。

●二科目目が始まったが、一科目目のことが頭からはなれない。「きつと、点数は悪いはずだ。もつとちゃんとやればよかったのに……。」二つ目の科目は高得点をとらないと……。難しい。全然集中できない。「そしてこの科目も失敗。構わない。全然構わない。そのままの自分でいなさい。」

●次の科目も次の科目も同じようにダメだった。そしてデータの返却。「無理だ。志望校を諦めよう。」こんなことをかなりの人がくり返す。

●さて、模試は何のためにあるのか？一つにはこういう負の連鎖を克服するためにあるのだ。でも受けるだけでは何も生まれない。では、どうするか？

を思い出して細かく細かく書き出すのだ。そうすると分かってくる。

●自分は、一回でも模試をちゃんとうけたことがあるのか？自分は自分のもつ力を発揮できたことがあるのか？先述したような人であれば、NOである。一〇〇回NOである。とすれば、それは何を意味するか？

●簡単。「学力がないのではなく、受け方が悪い。」「受けるときの心のコントロールが下手だ。」ということである。では、その先どうするか？これも簡単である。自分がテスト中に心配したことの一つ一つの分析をする。「心配してよかったことがあったか？」「心配は自分の勝手な想像ではないのか？」「分からない問題にいつまでもとり組んで、解けたか？」「それで時間をつぶして、他の問題の時間がなくなるって、いいの？」「終わった科目をひきずって、次の科目で集中できないって、いいの？」……。

●こういうことを時間をかけて考えるのだ。そして、分析した結果をこられた書き出さないといけない。まあ、書かない人は永遠に同じことをくり返すだろうね。かわいそうに。

●書き出せば、何度も見られる。一回の模試でキンハートを克服できるほど甘くはない。しかし、二回、三回と失敗してその度にこの作業をくり返せば、ふと気付くことがある。「そうか、次からこうしよう。」

きつとそう思うはずだ。

●いいかい、模試には、自分のキンハートを克服するためのヒントがある。数多く受けてみよう。次回は、弱点克服のことについて。(以下次号)

(小林(健))

▼▲継続希望の方へ▲▼

- ▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
- ▶在籍していた教室までご連絡ください。

